

三十六歌仙基礎資料稿

吉海 直人

〔要旨〕 本論では「三十六歌仙」の普及をめざし、基礎作業として「三十六歌仙」の翻刻・現代語訳・出典・鑑賞・作者・他秀歌を載せ、簡単な解説を付した。解説では「三十六歌仙」という作品が抱える複雑な特徴にも言及した。

〈解説〉「三十六歌仙」について

—

『三十六歌仙』の原点は、藤原公任が編んだ『三十六人撰』である。そこには著名な歌人の歌が十首（六人）、それ以外の歌人の歌が三首（三十人）ずつ採られている（計百五十首）。その歌人の歌から任意に各一首を選んだ一首歌仙本が、いわゆる「三十六歌仙」（ダイジェスト版）である。それが最初から一人一首の百人一首とは大きく異なる点といえる。

それだけでも和歌の組合せ（取捨選択）は複雑であるが、「三十六歌仙」にはさらに面倒なことが生じている。というのも、藤原定家の父俊成は公任の撰歌に不満があったようで、自ら歌人はそのまま、和歌を大幅に差し替えた『俊成三十六人歌合』（全一〇八首）を編纂しているからである。これが別々の名称だったら問題にならなかったのだが、世間に流布している「三十六歌仙」の多くは、俊成の選んだ歌からも適宜歌を選んでおり、それも同じく「三十六歌仙」として流布しているの、根本的に定義が混乱しているのである。

それだけではない。室町期の近衛尚通は、『俊成三十六人歌合』に自ら歌を各一首追加しているが、その増補歌を含む「三十六歌仙」も報告されている。また天和三年（一六八三年）に刊行された『歌仙金玉抄』など、一首掲載しただけでなく「書替歌」として掲出歌の他に各四首が付けられており、計五首の

中から自由に歌が選べるようになっていた。要するに誰でも「三十六歌仙」の撰者になれるのである。これこそ「三十六歌仙」の複雑さを象徴している本ではないだろうか。

わずか三十六首の小品でありながら、「三十六歌仙」という作品はこのように複雑なものであり、それが一般的な諸本分類を困難なものにしているのみならず、研究を妨げてきたのである。

二

本論では、高台寺に所蔵されている狩野光信の描いた古い「三十六歌仙図」を底本としている。しかしながら痛みが激しいものもあり、絵や字が剥落して判読できなくなっているものも少なくない。そこでやむをえず、高台寺の近くにある円徳院に所蔵されている美麗な「三十六歌仙」(狩野尚信画)を用いて便宜的にそれを補っている。^(注)

その底本の中には、公任撰になく俊成撰にのみある歌も少なからず含まれている(むしろほとんどが俊成撰)。それこそが一般に流布している「三十六歌仙」の実情であった。

なお基礎資料稿作成にあたって、次のような注を施してい

る。

- ① 歌には通行の歌番号を施した。
- ② 歌の下のカッコ内の「公」は公任撰「三十六人撰」所収、「俊」は俊成撰「俊成三十六人歌合」所収であることを示す。二つあるのは共通歌ということである。
- ③ 次に歌の出典(勅撰集)を示した。
- ④ それに続いて私に現代語訳を施し、鑑賞・作者・他秀歌について注記した。

〈三十六歌仙基礎資料稿〉

1 ほのぼのと明石の浦の朝霧に鳥隠れゆく舟をしぞ思ふ (公)

〔出典〕古今集四〇九・卷九「題知らず 読み人知らず」左

注「この歌はある人の曰く柿本人麿が歌なり」・古今集仮名序「人麿」

〔現代語訳〕ほのぼのと明けていく明石の浦の朝霧の中、鳥影に姿を消していく舟を見ているとしみじみとした気分になることよ。

〔鑑賞〕この歌は『万葉集』になく、『古今集』でも読み人知らずの伝承歌だが、仮名序では「人麿」とし、また左注で

も人麿作であることを示唆している。『人麿集』に所収されたことで人麿の代表歌とされるようになった。

〔作者〕柿本人麿 生没年未詳。主に持統・文武朝（六五八年頃～七〇七年頃）に活躍した宮廷歌人。『古今集』仮名序で「歌聖」と讃えられている。『万葉集』では「人麻呂」だが、平安時代は「人麿」、百人一首では「人丸」と表記するのが一般的。

〔他秀歌〕あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む（百人一首）

山鳥の垂れ下がった長い尾のように、私はこの長い秋の夜を独り寂しく寝るのでしょいか。

2 桜散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける（公）

〔出典〕拾遺抄四二・拾遺集六四・卷一「亭子院歌合に」

〔現代語訳〕桜が散る木の下を吹く風は寒くはないが、天のあずかり知らぬ雪（桜のはなびら）が降っていることよ。

〔作者〕紀貫之 生年未詳。八七二年頃～天慶八年（九四五）年。望行の息子。友則の従兄弟。『古今集』撰者の一人。

仮名序を書く。『土佐日記』の作者。藤原公任の『三十六人撰』によって、人丸と並ぶ大歌人と評価された。『後撰

集』の撰者の一人である紀時文は貫之の息。

〔他秀歌〕むすぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな（古今集四〇四番）

水を掬うために結んだ手のひらから落ちる雫で濁ってしまふほど小さな山の井戸の水（鬮伽）ではありませんが、満足しないままあなたとお別れしたことです。

人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香に匂ひける（百人一首）

あなたはさあどうでしょう、お気持ちもわかりませんが、故郷（旧都）の奈良では梅の花が昔のままに変わらわず咲き匂っています。

3 いづくとも春の光はわかなくにまだみ吉野の山は雪降る

（俊）

〔出典〕後撰集一九・卷一「同じ（延喜）御時御厨子所にさぶらひけるころ、沈めるよしを嘆きて、御覽せさせよとおぼしくて、ある藏人に贈りて侍ける十二首がうち」

〔現代語訳〕どこといて春の光は分け隔てしないのに、まだ吉野の山には雪が降っていることよ（同じように私は帝

の恩恵を蒙ることなく（官位の昇進もなく）不遇の身で沈

んでいることよ。

〈作者〉凡河内躬恒おほしこうちのみつね 生没年未詳。八〇〇年代後半に活躍。

貞観二年（八六〇年）から元慶三年（八七九年）まで卑官を歴任している。『古今集』撰者の一人。

〈他秀歌〉心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花（百人一首）

それと見定めて折るなら折ることができるとしようか。

初霜が置いたために、見分けがつきにくくなった白菊の花を。

4 逢ひにあひてもの思ふころの我が袖に宿る月さへ濡るる顔なる（俊）

〈出典〉古今集七五六・卷十五「題知らず」

〈現代語訳〉あれほどまで何度も逢っておきながら、あなた

に捨てられて物思いにふけている私の袖は涙で濡れていますが、その袖に映る月まで泣き顔をしていることです。

〈作者〉伊勢 藤原継蔭の娘。貞観十四年（八七二年）頃、天慶元年（九三八年）頃。宇多天皇の中宮温子に仕えた女

房。その間、藤原仲平・宇多天皇・敦慶親王など複数の男性に愛される。親王との間には歌人の中務が誕生してい

る。『古今集』所収歌二十二首は小町を抜いて女性トップ（全体でも七番目に多い）。

〈他秀歌〉三輪の山いかに待ち見む年経とも尋ぬる人もあらじと思へば（古今集七八〇番）

私は三輪の山であなたをお待ちすることはいたしません。たとえ何年経つてもあなたが私を訪ねてくれるはずもないので。

難波潟短き葦の節の間もあはでこの世をすぐしてよとや（百人一首）

難波潟に生えている葦の節の間のような短い間も逢わずにこの世を過ごせとあなたはおっしゃるのですか。

5 まきもくの檜原もいまだ曇らねば小松が原に淡雪ぞ降る（俊）

〈出典〉新古今集・卷二十「題知らず」・万葉集二二三四「ま

きむくの檜原もいまだ雲居ねば小松がうれゆ淡雪流る」

〈現代語訳〉まきもくの檜原にはまだ雪雲がかかっているのに、小松の生えた原には淡雪が降っていることだ（春は

もう近い）。

〈鑑賞〉『万葉集』では冬の歌だが、新古今では初春の歌にな

っている。またこの歌は『万葉集』では作者不詳であるが、左注に「柿本朝臣人麻呂歌集」に出ているとあるので、家持の歌とするのは疑わしい。概して『家持集』には非家持歌が多い。

〈作者〉大伴家持 養老二年（七一八年）頃〜延暦四年（七八五年）。旅人の息。『万葉集』に四百八十首の歌があることから、撰者とされている。

〈他秀歌〉かささぎの渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける（百人一首）

天の川の鵲の橋に霜が置いたように白くなっているのを見ると、随分夜が更けたようです。

あらたしき年の始めの初春の今日降る雪のいやしけよごと（万葉集四五・一六番）

新年の始めの初春の今日雪が降り積もっているが、その縁起のいい雪のように今年もいいことがたくさんありますように。

6 明日からは若菜摘まむとしめし野に昨日も今日も雪は降りつつ（公・俊）

〈出典〉新古今集一一・卷一「題知らず」・万葉集一四二七

「明日よりは」

〈現代語訳〉明日になったら若菜を摘もうと標しめを結っておいた野に、昨日も今日もずっと雪が降り続けていることだ。

〈鑑賞〉早春の若菜摘みの歌。「雪」なのに春の到来を予感させる。

〈作者〉山辺赤人 生没年未詳。およそ大宝元年（七〇一年）頃〜天平勝宝二年（七五〇年）頃に活躍した歌人。特に聖

武天皇期に活躍。『古今集』仮名序で人麿と共に「歌聖」と称されている。『万葉集』では「山部」だが、平安時代

は「山辺」表記が一般的。「山辺」表記は万葉歌人とは別の平安歌人と見たい。

〈他秀歌〉和歌の浦に潮満ち来ればかた湯をなみ芦辺をさして鶴か鳴き渡る（万葉集九一・九番）

和歌の浦に潮が満ちてくると干潟がなくなるので、葦の茂っている辺りをめざして鶴が鳴きながら飛んでいくことよ。

田子の浦に打ち出でてみれば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ（百人一首）

田子の浦に進み出て見ると、霊峰富士山に雪がしきりに

降っていることです。

7花にあかぬ嘆きはいつもせしかどもけふの今宵に似る時はなし (俊)

〈出典〉新古今集一〇五・卷二「題知らず」・伊勢物語二九段
 〈現代語訳〉花の美しさに未練を残して別れる悲しさは何度も経験したが、今日の別れは取り分け悲しいことです。
 (昔男の二条后への断ち切れない思慕)

〈鑑賞〉「今宵」ではなく「今夜」の意味。

〈作者〉在原業平 天長二年(八二五年)〜元慶四年(八八〇年)。阿保親王の息。母は伊都内親王。行平の異母弟。後に臣籍降下して在原姓を賜う。従四位上近衛中将。『伊勢物語』の主人公昔男のモデル。六歌仙の一人。紀氏との関わりが深い。卒伝に「体貌閑麗、放縱拘らず、ほぼ才覚無きも、よく和歌を作る」と記されている。

〈他秀歌〉世の中に絶えて桜のなかりせば春のころはのどけからまし (古今集五三番)

いっそのこと世の中に桜がなかったら、のんびりと春を過ごすことができるだろうに。

ちはやふる神代も聞かず龍田川からくれなゐに水くくると

は(百人一首)

神代にも聞いたことがありません。龍田川を真つ赤な紅葉がちりばめ、川一面を錦織にするということなど。

8石の上いそかみふるの山辺の桜花植えけむ時を知る人ぞなき (俊)
 〈出典〉後撰集四九・卷二「大和の布留の山をまかるとて」
 〈現代語訳〉(石上の)布留の山辺の桜は、地名のように古い(布留)ので、いつ植えたかを知っている人としていない。

〈鑑賞〉「石の上」は「ふる」に掛る枕詞。

〈作者〉僧正遍昭 俗名は良岑宗貞よしみかのむねたか。弘仁七年(八一六年)〜寛平二年(八九〇年)。桓武天皇の孫。『文徳実録』に「宗貞は先皇の寵臣なり。先皇の崩後、哀慕あやむ已むことなし。自ら仏理に帰し、以て報恩を求む」とあるように、嘉祥三年(八五〇年)の仁明天皇崩御後に三十五歳の若さで出家している。後に僧正の位に就く。六歌仙の一人。仁明天皇の皇子常康親王が隠棲された雲林院での文学活動は注目される。

〈他秀歌〉末の露本のしづくや世の中の遅れ先立つためしなるらむ (新古今集七五七番)

木の先端の露と根元の雫とどちらが先に落ちるかその早

い遅いは、この世の中のはかなさを喩えているのではない
でしょうか。

天津風雲の通ひ路吹きとぢよ乙女の姿しばしとどめむ(百
人一首)

空を吹く風よ、雲の中の通い路を吹き閉ざして下さい。
舞い終わって帰っていく美しい天女たちの姿を、もうしば
らくとどめておきたいから。

9 我のみやあはれと思はむひぐらしの(きりぎりす) 鳴く夕か
げの大和撫子 (俊)

〔出典〕古今集二四四・卷四「寛平御時后宮歌合の歌」

〔現代語訳〕私だけが可憐だと思うのだろうか。ひぐらし

(こおろぎ) が鳴く夕日に照らされている大和撫子の花を。

〔鑑賞〕^{ひぐらし} 蛸もきりぎりす(蟋蟀) も共に秋の風物だが、「きり

ぎりす」の方が一般的。

〔作者〕素性法師 俗名は良岑^{よしみねのほたるし}玄利。生没年未詳。九〇〇年

前後に活躍。僧正遍昭の息。遍昭が出家した八五〇年以前
に生まれたこと、また九〇五年に自ら屏風歌を書いている

ことから、それまで生存していたことがわかる。『古今集』

の有力歌人。

〔他秀歌〕今来むといひしばかりに長月の有明の月を待ち出
でつるかな(百人一首)

すぐに来るよ(行くよ)とあなたがとおっしゃったもの
から、それをあてにして毎夜待っているうちに、いつしか
秋も更け、九月下旬の有明の月が出るのを待ち明かしてし
まったことです(あなたは来ない)。

10 夕されば蛸よりけに燃ゆれども光見ねばや人のつれなき
(俊)

〔出典〕古今集五六二・卷十二「寛平御時后宮歌合の歌」

〔現代語訳〕夕方になると私は恋の思いに蛸よりも激しく燃

えているが、蛸と違って光が見えないからかあの人はつれ

ないことよ。

〔作者〕紀友則 生年未詳。延喜五年(九〇五年)頃没。有

朋の息。貫之の従兄弟。歌合で活躍し、また説話も残して

いる。『古今集』の撰者の一人だが、奏覧前に亡くなった。

〔他秀歌〕夕されば佐保の川原の川霧に友まどはせる千鳥鳴

くなり(拾遺集二三八番)

夕方になると佐保の川原に川霧が立ち込め、友とはぐれ

てしまった千鳥がしきりに鳴いていることだ(なんと心細

いことよ。

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ（百人一首）

（公・俊）

のどかに陽が射している春の日に、どうして桜の花は落

ち着いた心もなく慌ただしく散るのでしょうか。

11 遠近のたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな

（公・俊）

〔出典〕古今集二九・巻一「題知らず 読み人知らず」

〔現代語訳〕遠近の区別もつかない山中で、頼りなげに私を

呼んで惑わすように鳴いている呼子鳥であることよ。

〔鑑賞〕作者未詳の伝承歌だが、『猿丸集』にあることから作

者を猿丸としている。「呼子鳥」は子を呼ぶような鳴き声

からの命名（掛詞）。郭公かとされるが未詳。

〔作者〕猿丸大夫 生没年未詳。伝承的な歌人で実在人物か

どうかも不明。歌仙絵ではやや異様な風貌に描かれること

が多い。

〔他秀歌〕奥山に紅葉踏みわけ鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲し

き（百人一首）

奥深い山に紅葉を踏み分けやって来て、鹿の鳴き声を耳

にすると、秋の悲しさが身に染みて感じられます。

12 花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせし

まに（公・俊）

〔出典〕古今集一二三・巻二「題知らず」

〔現代語訳〕桜の花はすっかり散ってしまったなあ（私の容

色もすっかり衰えてしまったなあ）。むなしく物思いにふ

けて時を過ごしている間に。

〔作者〕小野小町 生没年未詳。八二〇年頃～八七〇年頃。

仁明・文徳朝（八三三年頃～八五八年頃）に活躍。仁明天

皇の更衣小野吉子かとされている。絶世の美人また和歌の

名手として有名。六歌仙の一人。晩年の零落説話も有名。

〔他秀歌〕色見えて移ろふものは世の中の人の心の花にぞあ

りける（古今集七九七番）

顔色にも表れないでいつの間にか変わるの、この世の

中の人（移り気な男）の心なのですね。

13 短か夜の更けゆくまに高砂の峰の松風吹くかどぞ聞く

（俊）

〔出典〕後撰集一六七・巻四「夏夜深養父が琴ひくを聞きて」

〔現代語訳〕夏の短か夜が更けてゆくにつれ、あなたの弾く

琴の音は風が峰の松を吹いている音かと聞こえることよ。

〔鑑賞〕 琴の音を松風に喩えるのは中国文学からの影響（斎

宮女御の歌も同様）。「高砂の」は「峰」にかかる枕詞。歌

枕の「高砂」とは別。

〔作者〕 藤原兼輔 元慶元年（八七七年）～承平三年（九三三

年）。藤原利基の息。紫式部の曾祖父。藤原定方の従兄弟。

定方とともに文学サロンのパトロンとなり、醍醐朝の文化を支えた。

〔他秀歌〕 みかの原わきて流るる泉川いつみきとてか恋しからむ（百人一首）

みかの原を分けて（湧きて）流れる泉川、その泉の「いつ見」ではありませんが、いつ逢ったというのであなたのことがこんなに恋しいのでしょうか。

14万世よろづよの始めとけふを祈りおきて今ゆく末は神ぞ知るらむ（かぞへむ）（公・俊）

〔出典〕 拾遺抄一七一・拾遺集二六三・卷五「天曆御時斎宮

下り侍りける時の長奉送使ちやうほうそうしにてまかり帰らむとて」

〔鑑賞〕 「長奉送使」は斎宮下向に従って伊勢まで供奉する参

議のこと。伊勢からの帰京に際して詠んだ歌。

〔現代語訳〕 万代まで続く御代の始まりと今日のよき日を祈

って、これから将来のことはみんな神にお任せしよう。

〔作者〕 藤原朝忠 延喜十年（九一〇年）～康保三年（九六六年）。右大臣定方の五男。笙の名手として知られている。

また右近との艶聞も知られている。

〔他秀歌〕 逢ふことの絶えてしなくはなかなか人にをも身をも恨みざらまし（百人一首）

いつそ逢うことが二度と無いのなら、かえってあなたのつらさも我が身のはかなさも、恨まないで済んだでしょうに。

15物思ふと過ぐる月日も知らぬ間に今年もけふに果てぬとか聞

く（俊）

〔出典〕 後撰集五〇六・卷八「御みくしげ匣げ殿どのの別当に年を経て言ひ

わたり侍りけるをえ逢はずしてその年のしはすのつごもりの日つかはしける」

〔現代語訳〕 物思ものしいしていると月日が過ぎるのにも気付かな

いで、はや今年も今日で終ると聞いたことだ（来年こそは是非あなたと逢いたい）。

〔作者〕 藤原敦忠 延喜六年（九〇六年）～天慶六年（九四三

年)。左大臣時平の三男。母は在原業平の孫ということ、本人も恋多き貴公子。琵琶の名手で枇杷中納言とも称された。また『大鏡』では「めでたき和歌の上手」と言われている。三十八歳の若さで死去。

〔他秀歌〕逢ひ見ての後の心にくらぶれば昔は物を思はざりけり(百人一首)

あなたと契りを結んだ今の恋しさに較べると、逢う以前の物思いなど無きに等しいものでした。

16 春過ぎて散りはてにける(り) 梅の花ただ香ばかりぞ枝に残れる (公・俊)

〔出典〕拾遺抄四〇七・拾遺集一〇六三・卷十六「比叡の山に住み侍ける頃、人の薰物を乞ひて侍りければ、侍りけるままに少しを梅の花のわづかに散り残りて侍る枝に付けて遣はしける 如覚法師」

〔現代語訳〕春が過ぎて梅の花も残らず散ってしまったが、ただ香だけがわずかに枝に残っていることだ。お求めの薫物は梅花香を少しだけ贈ります。

〔鑑賞〕「かばかり」には「香ばかり」が掛けられている。〔作者〕藤原高光 天慶二年(九三九年)頃、正暦五年(九

四四年)。右大臣師輔の息。応和元年(九六一年)俄に出家して多武峰に隠棲したので多武峰少将と称される。『多武峰少将物語』のモデル。なお「如覚」は高光の法名。〔他秀歌〕かくばかり経がたく見ゆる世の中をうらやましくも澄める月かな (拾遺集四三五番)

このように過ごしにくい(住みにくい)と思える世の中なのに、月は羨ましいほどに清らかに澄んで(住んで)いることよ。

17 玉櫛笥ふたとせあはぬ君が身をあけながらやは見むと思ひし (公・俊)

〔出典〕後撰集一一二三・卷十五「小野好古朝臣西の国の討手の使にまかりて二年といふ年、四位にはかならずまかりなるべかりけるをさもあらずなりにければかかる事にしも指されにける事のやすからぬよしを愁へ送りて侍りける文の返事の裏に書きつけてつかはしける」

〔現代語訳〕二年も会わなかつたあなたの身を、四位になれず五位の朱の衣のままで見ようとは思ひもしなかつた。

〔鑑賞〕枕詞「玉櫛笥」から「蓋」が導かれ、それが「二年」の掛詞となっている。なおこの話は『大和物語』四段にも

出ている。

〔作者〕源公忠きんただ 寛平元年（八八九年）～天曆二年（九四八年）。光孝天皇の孫。国紀の息。信明の父。醍醐天皇の信望が篤かった。

〔他秀歌〕行きやらで山路暮らしつほととぎす今一声の聞かまほしさに
（拾遺集一〇六番）

山道を行きすぎることができず日を暮らしてしまいました。山道で聞いたほととぎすの鳴き声をもう一度聞きたいばつかりに。

18 春立つといふばかりにやみ吉野の山もかすみてけさは見ゆらむ（公・俊）

〔出典〕拾遺抄一・拾遺集一・卷一「平定文が家の歌合に詠み侍りける」

〔現代語訳〕暦の上で立春になったというだけで、吉野の山も今朝は霞がかかったように春めいて見えるのだろうか（実際はまだ雪に埋もれている）。

〔作者〕壬生忠岑 生没年未詳。九〇〇年前後に活躍。忠見の父。卑官を歴任する中、『古今集』の撰者の一人となる。

身分は低くとも歌人として一流であった。

〔他秀歌〕有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし（百人一首）

後朝の別れの空にかかる有明の月を見てからというものの、暁ほどつらく悲しいものはありません。

19 袖にさへ秋の夕べは知られけり消えし浅茅が露をかけつつ
（俊）

〔出典〕新古今集七七八・卷八「一品資子内親王にあひて昔のことども申出だしてよみ侍りける」

〔現代語訳〕袖でだつて秋の夕べのあわれは知ることができません。浅茅が露のようにはかなくお亡くなりになった村上天皇を偲んで涙を流している私ですから。

〔鑑賞〕この歌の「袖」は喪服の袖。村上天皇は康保四年（九六七年）五月崩御。佐竹本三十六歌仙の絵は、この歌の歌意図のようである。

〔作者〕齋宮女御 延長七年（九二九年）～寛和元年（九八五年）。醍醐天皇皇子重明親王の娘御子。八歳で齋宮となり、その後村上天皇の女御となったので齋宮女御と称される。資子内親王は娘。

〔他秀歌〕琴の音に峰の松風通ふらしいづれの緒より調べそ

めけむ（拾遺集四五一番）

琴の音に峰の松風が通い合っているようです。これは琴のどの緒と峰のどの尾から奏で始められたのでしょうか。

20 ひとふしに千代をこめた（つ）る杖なればつくともつきじ君が齡は（公・俊）

〔出典〕拾遺抄一八〇・拾遺集二七六・卷五「同じ（中宮の）賀に竹の杖作りて侍りけるに」

〔現代語訳〕一節ごとに千代の寿命をこめた杖なので、どれだけ杖をついてもあなたの寿命は尽きることはあるまい。

〔作者〕大中臣頼基 仁和二年（八八六年）頃〜天徳二年（九五八年）頃。伊勢神宮の祭主・神祇伯を歴任。輔道の息。能宣の父。大中臣家重代歌人の祖。

〔他秀歌〕子の日する野辺に小松を引きつれて帰る山路に鶯ぞ鳴く（玉葉集一一二）

子の日ひに小松を引くように、たくさんの子を引き連れて

帰る山路に鶯が鳴いていることだ。

21 秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

（公・俊）

〔出典〕古今集一六九・卷四「秋立つ日よめる」

〔現代語訳〕秋が来たと見た目（視覚）でははつきりわかないが、涼しい風の音（聴覚・触覚）にああもう秋だなと気付かされることだ。

〔鑑賞〕「立秋」の歌。「風の音」は多く秋の到来に用いられる。

〔作者〕藤原敏行 生年未詳。八五〇年頃〜延喜元年（九〇一年）あるいは延喜七年（九〇七年）。能書家。業平とは

妻同士が姉妹であった。藤原氏の歌人としては古い方である。

〔他秀歌〕住の江の岸に寄る浪夜さへや夢の通ひ路人目よくらむ（百人一首）

住の江の岸に寄る波ではありませんが、昼だけでなく夜までも、さらにその夢の中の通い路さえも、あなたは人目をさげようとなさるのでしようか（逢いに来てくださらないのでしょうか）。

いのでしょうか）。

22 夏刈りの玉江の葦を踏みしだき群れる鳥の立つ空ぞなき

（俊）

〔出典〕後拾遺集二一九・卷三「題知らず」

〔現代語訳〕夏刈りの行なわれた玉江（福井県）の葦原では、

棲みかを失った鳥たちが葦の切り株を踏み惑って、空に飛び立ちかねていることよ。

〔作者〕源重之 生年未詳。九四〇年頃〜長保二年（一〇〇〇年）頃。兼信の息（清和天皇の曾孫）。地方官を歴任して六十歳前後で没か。

〔他秀歌〕風をいたみ岩うつ浪のをのれのみくだけで物を思ふころかな（百人一首）

風が激しいので、岩にあたる波が砕け散るように、あなたは平気かもしれません、私はひどく物思いに心を砕いています。

23 常磐なる松の緑も春来れば今ひとしほの色まさりけり（公俊）

〔出典〕古今集二四・卷一「寛平御時后宮歌合によめる」

〔現代語訳〕常緑の松の緑も春が来ると、もう一回染め汁に浸したように緑の色が濃くなることだ。

〔鑑賞〕春の訪れを寿ぐ歌。「二人」はいっそうの意。

〔作者〕源宗子 生年未詳。天慶二年（九三九年）没。光孝

天皇の孫、是忠親王の息。寛平六年（八九四年）に臣籍降下した。『古今集』撰者時代の有力歌人。

〔他秀歌〕山里は冬ぞ寂しさまさりける人目も草もかれぬと

思へば（百人一首）

山里は冬が格別に寂しく感じられます。人が訪ねて来なくなり、草も枯れてしまおうと思うと。

24 あたら夜の月と花とを同じくはあはれ知れらむ人に見せばや

（公・俊）

〔出典〕後撰集一〇三・卷三「月のおもしろかりける夜花を見て」

〔現代語訳〕見逃すには惜しい今夜の月と花とを、どうせなら物のあわれを知っている人に見せたいものだ（あなたと一緒に見たい）。

〔作者〕源信明^{のがみち} 延喜十年（九一〇年）〜天禄元年（九七〇年）。公忠の息。地方官を歴任。中務と親密な関係にあった。

〔他秀歌〕物をのみ思ひ寢覚めの枕には涙かからぬ暁ぞなき

（新古今集八一〇番）

父の死の悲しみのあまり夢の中でも泣いているからでしょうか、暁に目覚めた私の枕は涙で濡れていない日とてありません。

25子の日しにしめつる野辺の姫小松引かてや千代のかげを待た
まし (公・俊)

〔出典〕新古今集七〇九・卷七「子日をよめる」

〔現代語訳〕子の日のお祝いのために標を結っておいた姫小松だが、引き抜かないで千年後に大木に育つて豊かな木陰を作るのを待とうか。

〔作者〕藤原清正 延喜年間(九〇〇年代)頃(天徳二年(九五八年))兼輔の息。延長八年(九三〇年)従五位下に叙爵。その後地方官を歴任。

〔他秀歌〕天つ風ふけひの浦にある鶴つるのなか雲居ぐもいに帰らざるべき (新古今集一七三三番)

天つ風が吹くという名を持つ吹飯の浦にいる鶴が、どうして雲の上に帰らないことがありますか(私もいつか昇殿を赦されて宮中に帰ります)。

26春深み井出の川浪立ちかへり見てこそゆかめ山吹の花 (俊)

〔出典〕拾遺抄四七・拾遺集六八・卷二「天曆御時歌合」

〔現代語訳〕春も深まって井出の川浪が立ち返っているように、私も行く春を惜しんで美しい山吹の花を立ち返り立ち返りじっくり見ていこう。

〔作者〕源順しんたう 延喜十一年(九一一年)〜永観元年(九八三年)。拳こぶの息。和漢の才にすぐれ、『和名類聚抄』(辞書)を撰進。梨壺の五人の一人として、『万葉集』の訓読と

『後撰集』の撰者になる。『伊勢物語』や『うつほ物語』の作者にも擬せられている。当時最大級の文化人。

〔他秀歌〕水の面に照る月次つきなみを数ふれば今宵ぞ秋もなかの最中もなかなりける (拾遺集一七一番)

月光に照らされている水面の浪の数(月次)を数えてみると、今夜は中秋の名月(八月十五夜)であったなあ。

27契りけむ心ぞ辛たなはたき織女たなはたの年にひとたび逢ふは逢ふかは(公・俊)

〔出典〕古今集一七八・卷四「同じ(寛平)御時后宮歌合の歌」

〔現代語訳〕一年に一度逢おうと約束した織姫の心はつれないなあ。一年に一度の逢瀬など逢ううちに入らないよ。

〔鑑賞〕年中行事の「七夕」を詠んだ歌。「織女」と書いてあっても「たなはた(柵機女)」と読む。

〔作者〕藤原興風 生没年未詳。藤原浜成の曾孫。道成の息。宇多朝に活躍。友則と優劣を競いあう程の『古今集』撰者

時代の有力歌人。

〈他秀歌〉誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなく

に〔百人一首〕

一体誰を昔からの友達としましょうか。高砂の松の他に

誰もいませんが、その松にしても、決して昔からの友ではないものを。

28契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山浪こさじとは

〔俊〕

〈出典〉後拾遺集七七〇・卷一四「心変りて侍りける女に人

に代りて」

〈現代語訳〉約束したよね。互に嬉し涙の袖を絞っては絶対

に心変わりなどしないと。それなのにあなたは。

〈鑑賞〉『古今集』東歌「君をおきてあだし心をわが持たば末

の松山浪も越えなん」を踏まえる。本歌の男の心変わりを女の心変わりに詠みかえている。この東歌には、千年前の

貞観地震の際に起こった大津波の記憶が詠み込まれている

とも考えられている。

〈作者〉清原元輔 延喜八年（九〇八年）～永祚二年（九九〇

年）。深養父の孫。清少納言の父。寛和二年（九八六年）

に肥後守として赴任し、現地で没した。梨壺の五人〔後撰集〕の撰者〕の一人。

〈他秀歌〉秋の野の萩の錦を我が宿に（ふるさとに）鹿の音

ながら移してしがな（和漢朗詠集二八五）

秋の野に錦のように咲いている萩の花を、私の邸に鹿の

音と一緒に移し植えたいものだなあ。

29み吉野の山の白雪積もるらし故郷寒くなりまさるなり（公

・俊）

〈出典〉古今集三二五・卷六「奈良の京にまかれる時に宿れ

りける所にてよめる」

〈現代語訳〉吉野山の白雪は降り積もっていることだろう。

旧都奈良がこんなに寒くなったのだから。

〈鑑賞〉詞書によれば吉野ではなく平城京で詠んだ歌。

〈作者〉坂上是則 生没年未詳。九〇〇年前後に活躍。坂上

田村麻呂の末裔。延喜八年（九〇八年）から延長二年（九

二四年）までの任官記録がある。『古今集』撰者時代の有

力歌人。蹴鞠の名手。『後撰集』の撰者の一人坂上望城は

息。

〈他秀歌〉朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる

白雪（百人一首）

夜がほのかに明け始めるころ、有明の月が照っているのかと思うほどに、吉野の里に降りつもっている雪のなんと白いことよ。

30 咲きにけり我が山里の卯の花は垣根に消えぬ雪と見るまで

（俊）

〈出典〉元貞集 勅撰集不掲載歌

〈現代語訳〉私の住んでいる山里では白い卯の花が満開に咲いている。それはまるで垣根に消え残った雪のように見える。

〈作者〉藤原元貞^{もとさだ} 生没年未詳。清邦の息。承平五年（九三

五年）加賀掾から康保三年（九六六年）丹波介までの任官記録がある。天徳内裏歌合の歌人にも撰ばれている。

〈他秀歌〉君恋ふとかつは消えつつ経るほどにかくても生ける身とや見るらむ
（後拾遺集八〇七番）

あなたが恋しくて私は消え入るばかりです。それでも私は死なないで生きていますとあなたは御覧になるのでしょうか。

31 岩橋の夜の契りも絶えぬべし明くるわびしき葛城の神（公

・俊）

〈出典〉拾遺抄四七七・拾遺集一二〇一・卷十八「大納言朝光下臆に侍ける時女のもとに忍びてまかりて曉に帰らじと言ひければ」

〈現代語訳〉久米路の岩橋の工事が中断したように、あなたとの仲も途絶えそうです。葛城の神のように醜い私の顔を見ようと、夜明けまで帰らないおつもりなら（顔を見られるのは恥ずかしい）。

〈鑑賞〉通い婚の場合、男は暁（午前三時過ぎ）になると帰った。背景に役の行者^{ぎやうじや}と容貌の醜い葛城の神（一言主神^{ひとことぬし}）の架橋伝説を踏まえている。

〈作者〉小大君 天慶三年（九四〇年）頃寛弘八年（一一一年）父母未詳。「こおおきみ」あるいは「こだいのきみ」と読む。「三条院女藏人左近」とも称した。

〈他秀歌〉大井川そま山風の寒ければ立つ岩浪を（寒けきに岩うつ波を）雪かとぞ見る（新拾遺集六六九）

大井川に柚山から吹く風が寒いので、岩にぶつかって立つ浪のしぶきがまるで雪が降っているように見えることです。

32有明の月の光を待つほどに我が世のいたくふけにけるかな

(公・俊)

〔出典〕拾遺抄五〇九・拾遺集四三六・卷八「冷泉院の東宮

におはしましける時月を待つ心の歌男どもの詠み侍けるに

〔現代語訳〕月の出の遅い有明の月を待っているうちに、す

っかり夜も更けてしまったなあ。同時に東宮が即位してその恩恵を蒙るのを待っているうちに、私もすっかり老けてしまったなあ。

〔鑑賞〕冷泉院の東宮時代は十七年にも及ぶ。

〔作者〕藤原仲文 延長元年（九三三年）〜正暦三年（九九二年）。公葛の息。藏人から地方官を歴任。貞元二年（九七七年）上野介、正五位下。

〔他秀歌〕思ひ知る人に見せばやよもすがら我が常夏に置きゐたる露（拾遺集八三二番）

恋の情趣がわかる人に見せたいものです。私の庭の常夏の花に置いている露を（恋人の訪れもない私の寢床が涙でびっしり濡れているのを）

33昨日までよそに思ひしあやめ草けふ我が宿のつまと見るかな

(公・俊)

〔出典〕拾遺抄七三・拾遺集一〇九・卷一「屏風に」

〔現代語訳〕昨日まで疎遠に思っていた菖蒲を、今日（五月五日）我が家の軒の端に葺くと、まるで妻のように親しみを覚えることだ。

〔鑑賞〕『能宣集』の詞書に「五月、菖蒲ふきたる家の端に人ながめてゐたる所」とあるので、屏風に描かれた五月の絵を見て写的に詠んだ屏風歌であることがわかる。

〔作者〕大中臣能宣よしのぶ 延喜二十一年（九二二年）〜正暦二年（九九一年）。頼基の息。輔親の父。伊勢大輔の祖父。代々

伊勢神宮の祭主を勤める。後宮の五舎の一つである梨壺（昭陽舎）の五人の一人。『後撰集』の撰者の一人。

〔他秀歌〕御垣守衛士のたく火の夜は燃え昼は消えつつ物をこそ思へ（百人一首）

衛士のたく火が夜は燃えて昼は消えているように、恋の物思いに悩む私も、夜は燃えて昼は消え入るばかりです。34恋すてふ我が名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめし
か（俊）

〔出典〕拾遺抄二三五・拾遺集六二二・卷十一「天曆御時歌

合

〈現代語訳〉恋をしているという私の噂ははやくも広まってしまったことだ。誰にも知られないように秘かに思いそめたばかりなのに。

〈鑑賞〉天徳内裏歌合「恋」題で平兼盛の「しのぶれど」と番になって優劣を競った歌。

〈作者〉壬生忠見 生没年未詳。忠岑の息。天曆七年（九五

三年）以下の歌合で活躍している。『百人一首一夕話』によると、幼名は「多々」であり、成人して「忠実」と名乗ったが、後に「忠見」と改名したとのことである。

〈他秀歌〉いづかたに鳴きて行くらむほととぎす淀の渡りの
まだ夜深きに
（拾遺集一一三番）

どっちの方向に鳴いて飛び去っていくのだろうか。淀の渡り（辺り）はまだ真つ暗なのに。

35暮れてゆく秋の形見に置くものはわが元結ひの霜にぞありける
（公・俊）

〈出典〉拾遺抄一三二六・拾遺集二二四・卷三「暮れの秋重之が消息して侍りける返り事に」

〈現代語訳〉暮れて去ってゆく秋が形見に残していったもの

は、私の元結に置いた霜ならぬ白髪（老の象徴）であったなあ。

〈作者〉平兼盛 生年未詳。正暦元年（九九〇年）没。光孝天皇の玄孫。篤行王の息。最初は兼盛王だったが天曆四年（九五〇年）に臣籍降下し平姓を賜う。『後撰集』時代の有力歌人であるにもかかわらず、撰者になっていないことが不審がられている。

〈他秀歌〉忍ぶれど色に出でにけり我が恋は物や思ふと人の
問ふまで（百人一首）

忍びに忍んでも、私の恋心はつい顔に出ってしまったようです。誰かを恋しているのかと人が尋ねるほどまでに。

36秋風の吹くにつけても訪はぬかな荻の葉ならば音はしてまし
（俊）

〈出典〉後撰集八四六・卷十二「平かねぎがやうやうかれがたになりにければつかはしける」

〈現代語訳〉あなたは私に飽きたから、秋風が吹くことにかこつけても私を訪れてはくれないのですね。荻の葉だったら風に吹かれて音がした（訪れた）でしょうに。

〈鑑賞〉相手の「平かねぎ」については未詳。あるいは真材

(さねき)の誤写か。

〈作者〉中務なかつかき 延喜十二年(九一二年)頃〜正暦二年(九九年)二年。父敦康親王が中務卿だったことで中務と称する。母は伊勢。天曆・天徳期の代表的女流歌人。源信明を筆頭に複数の男性と恋愛関係があった。

〈他秀歌〉忘れられてしまどろむほどもがないつかは君を
夢ならで見む
(拾遺集一三二二番)

ほんのしばらくでも亡くなった娘の悲しみを忘れて眠りたいものです。もはや現実には会えないのだから、せめて夢で会いたいの眠ることもできません。

(注) 本論で底本としている「三十六歌仙」は、早苗ネネ氏のCD『京都・高台寺三十六歌仙和歌うた』所収本である。このCDは新たな「三十六歌仙」の流布本と考えている。

